

MEDStudio(メドスタジオ)

「隣の教育実践を聴いてみよう！」

5月29日(木) 13:00-17:00

5月30日(金) 9:00-12:00

---

## 第1セッション 5月29日(木) 13時00分～14時15分

---

### 1-1 循環器理学療法部門における ARCS モデルに基づいた On-the-Job Training の実践報告

○磯邊 崇(昭和大学横浜市北部病院リハビリテーション室)

### 1-2 メドギフトでの「熟達化」に関する学びを活かした教育実践

-自己主導的な学習者・熟達化の支援-

○児玉 慎吾(介護老人保健施設 恵風苑)

### 1-3 ソーシャルワーク実習における教育実践の報告

～メドギフトにて獲得した知識と経験を、教育実践へと繋げる取り組み～

○福田 安代(公立学校共済組合東海中央病院)

(14時30分～15時30分 caféタイム)

---

## 第2セッション 5月29日(木) 15時30分～16時45分

---

### 2-1 患者からの声から学ぶ：投書を通じたプロフェッショナリズム教育の実践

○高田 亮(岩手医科大学 医学教育学講座)

### 2-2 基礎教育と卒後教育をつなぐ看護教育実践

○末次 典恵(福岡大学医学部看護学科)

### 2-3 本学の早期臨床体験実習としてのエスコート実習の意義と学修効果について

○堀田 晶子(帝京大学医学教育学講座)

---

## 第3セッション 5月30日(金) 9時～10時15分

---

### 3-1 診療看護師(NP)が行う教育実践

○三宅 徹(藤原記念病院)

### 3-2 脱出ゲームを活用した看護学生の計算能力トレーニングの教育実践

○太田 雄馬(東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科)

### 3-3 超急性期領域でのセラピスト育成

～魅力ある卒後教育を目指したメドギフト終了後の私の挑戦～

○藤田 雅子(医療法人鉄蕉会 亀田総合病院)

---

## 第4セッション 5月30日(金) 10時25分～12時05分

---

### 4-1 魅力あるカリキュラム作り ～やってみないと分からない～

○高柿 有里(大阪医療福祉専門学校)

### 4-2 薬学部実験実習における ICT を活用した学習支援の取り組み

○高尾 郁子(京都薬科大学)

### 4-3 診療参加型臨床実習における自律学習と調整型学習の促進

○佐藤 直(札幌医科大学 医療人育成センター)

### 4-4 SimMan3G を用いた急性心筋梗塞初期対応のシミュレーション教育の実践

○伊藤 智範(岩手医科大学)

5月29日(木) 13時00分～14時15分

### 1-1 循環器理学療法部門における ARCS モデルに基づいた On-the-Job Training の実践報告

○磯邊 崇 (昭和大学横浜市北部病院リハビリテーション室)

本実践報告では、循環器理学療法部門において臨床経験3年目から6年目の理学療法士を対象に、ARCSモデルに基づいたOn-the-Job Training(以下OJT)を実施した。「リスクを管理し、安全な理学療法を実践できる」「チーム医療を実践できる」という行動目標を設定した。注意喚起、関連性、自信、および満足感の4つの要素を考慮したOJTを設計した。EPA、KPT法、事後アンケートを用いてOJTを評価した。リスク管理能力の向上やチーム医療への貢献といった成果が得られた一方で、薬剤の副作用や心電図の解釈に関する知識不足、多職種との連携強化が課題として残った。今後は専門性の向上と多職種連携体制の構築を推進する取り組みを継続していく必要があると考える。

キーワード：OJT、ARCSモデル、理学療法

### 1-2 メドギフトでの「熟達化」に関する学びを活かした教育実践

-自己主導的な学習者・熟達化の支援-

○児玉 慎吾 (介護老人保健施設 恵風苑)

メドギフトの教育内容の一つに「熟達化」があった。熟達化に関する講義動画や課題文献、eスポーツ領域や陸上競技選手の記事の提示など、受講者の私にとって「学びに夢中になる」仕掛けが多くあった。実際に、受講前より自己学習が習慣化し、熟達化の教育が自己主導的な学習者を育成する上で重要であると強く体感した。今回、Kolbの経験学習理論・認知的徒弟制による臨床教育と同時に、メドギフトで学び得た「熟達化」に関する構造化された知識を目の前の学習者の文脈に合わせ伝える教育介入を行なった。その結果、学習者が自己主導的な学習態度を獲得し、情意・精神運動・認知領域の臨床能力が向上した実践を報告する。

キーワード：熟達化、自己主導的な学習者

### 1-3 ソーシャルワーク実習における教育実践の報告

～メドギフトにて獲得した知識と経験を、教育実践へと繋げる取り組み～

○福田 安代 (公立学校共済組合東海中央病院)

メドギフトにより得た知識と経験から、学生がソーシャルワーク実習にて体験する内容を価値ある経験とするために、以下の3点に取り組んだ。一つ目は、心理的安全性を高め、学生の緊張を取り除き、MSWと安心して対話できる環境を整えること。二つ目は、ソーシャルワーク実践の観察内容を省察できる仕組みを整え、省察した内容についてMSWと対話する時間を設けること。三つ目は、ソーシャルワーク実習の目標、評価、パフォーマンス課題を学生と養成校側に提示し、毎日の実習に対して学習の動機付けができるしくみを作ることである。

キーワード：医療ソーシャルワーカー、リフレクション

(14時半～15時半 café タイム)

5月29日(木) 15時30分～16時45分

## 2-1 患者からの声から学ぶ：投書を通じたプロフェッショナリズム教育の実践

○高田 亮(岩手医科大学 医学教育学講座)

「患者からの投書」を題材とした、プロフェッショナリズム教育を行った。対象は医学部1年生の136名で、68名ずつ2回行った。学生は5～6名で1グループとなる様に構成し、患者からの医学生に対する投書を提示した。ワールドカフェ形式で、問題点の分析・解決策の検討・具体的な行動提案をテーマとしてディスカッションを行った。最後に各グループで、病院長として投書に対する返書を作成してもらい、全体共有を行った。多くの学生が、患者への共感や具体的な解決策といった点で、プロフェッショナリズムを意識できる返書を作成した。また授業終了時には、96%の学生が投書を生まない態度がとれると回答し、本教育の有効性が示唆された。

キーワード：プロフェッショナリズム、投書、PBL

## 2-2 基礎教育と卒後教育をつなぐ看護教育実践

○末次 典恵(福岡大学医学部看護学科)

看護職は人々に質の高い適切な医療・看護を提供するために、生涯学習が必須である。看護教育制度は、国家試験受験資格を得るまでの「看護基礎教育」と「資格取得後」に大別される。後者は大学院の修士・博士課程の学位取得を伴う「看護卒後教育」と、看護の質や能力向上のために積み上げる「看護継続教育」がある。私は現在、大学教員として、これらの3つの教育に関わる機会を得ており、学部生、大学院生、臨床看護職者を対象とした教育実践においてそれぞれの教育内容や方法を考えるとき、共通して学習者のレディネスの把握、学習の動機づけ、学習者のモチベーションの維持を心掛けている。今回は学習対象者に応じた具体的な実践を紹介したい。

キーワード：看護基礎教育、看護卒後教育、看護継続教育

## 2-3 本学の早期臨床体験実習としてのエスコート実習の意義と学修効果について

○堀田 晶子(帝京大学医学教育学講座医学)

目的：本学の早期臨床体験実習「エスコート実習」は現在医学部3年の選択科目で、外来患者の付添を通じ患者心情の理解を目的としている。学修効果や意義を検討する目的で今回の研究を行った。方法：実習後医学部3年にアンケートを実施し、参加者に対して参加理由と感想を尋ねた。記述内容の質的分析を行い、実習前後での意識の変化等を考察した。結果と考察：参加者全員が実習に肯定的であった。参加動機に関しては患者の立場、先輩/先生/同級生からの勧め、病院の仕組、漠然とした興味が上がり、感想では実習自体への強い印象、患者・家族理解、学修への意欲、人間としての成長が上がった。本実習の態度行動面の効果の大きさが推察された。

キーワード：早期臨床体験実習、患者理解、学修意欲

5月30日(金) 9時～10時15分

### 3-1 診療看護師(NP)が行う教育実践

○三宅 徹(藤原記念病院)

私が診療看護師(NP)(以下、NP)として、NP学生に対して臨床実習での教育活動の中で軸を置いているのは、個々の背景に対応した教育と、科学的根拠に基づく実践教育だ。

NP学生は、これまで経験してきた背景や今後目標とするNP像が異なる。そのため、個別の背景や目指すNP像を確認し学生の学習深達度に合わせながら、解剖生理学、薬理学、フィジカルアセスメントの高度実践看護師が学習すべき3Pを軸に、科学的根拠に基づき省察的実践を行っている。

当院でのNP学生に対する教育実践は開始したばかりであるため、今後は医師や看護師など多職種やNP学生からの評価を取り入れ、刷新しながら当院での教育実践の基盤を形成していく必要がある。

キーワード：診療看護師(NP)、省察的実践、臨床実習

### 3-2 脱出ゲームを活用した看護学生の計算能力トレーニングの教育実践

○太田 雄馬(東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科)

看護師にとって正確かつ迅速な計算能力は、点滴滴下数の調整や酸素ポンベの残量算出など、多くの臨床の場面で必要とされる。しかし、看護学生の中には計算に苦手意識を持つ者も少なくない。本教育実践では、看護学部1年生を対象に、脱出ゲームを取り入れた計算能力トレーニングを実施した。栄養、酸素投与、点滴に関する計算問題を学生同士で協力して正解することで、特定のキーワードを入手し、ストーリーを進めることができる設計とした。本教育実践によって、計算に苦手意識のある学生の学習への動機付けが高まり、協働学習を通じた理解の深化が期待された。脱出ゲーム形式の授業が、看護基礎教育の基礎的能力の学習に寄与する可能性を報告する。

キーワード：看護学生、脱出ゲーム、計算能力

### 3-3 超急性期領域でのセラピスト育成

～魅力ある卒後教育を目指したメドギフト終了後の私の挑戦～

○藤田 雅子(医療法人鉄蕉会 亀田総合病院)

超急性期領域のセラピスト育成は卒後教育が中心であり、多くの臨床家は、自身の臨床経験に基づいた教育を行っている。私もその一人である。メドギフト受講を契機に、学習者と教育者の相互支援の重要性に気付き、まず教育理念やプログラム内容を施設内で共有した。プログラム改定に取り組む中で、当院独自のジョブエイドを作成した。ジョブエイドは、学習者には臨床実践を推進する支援ツールとして、指導者には学習者の評価ツール(形成的評価)として活用できるよう設計した。ジョブエイドの各項目は、Millerのピラミッドの段階づけを用いて修得状況を可視化し、効果的かつ効率的に実践→評価→内省→概念化への学習支援を可能にした。

キーワード：相互支援、ジョブエイド、可視化

5月30日(金) 10時25分～12時05分

#### 4-1 魅力あるカリキュラム作り ～やってみないと分からない～

○高柿 有里 (大阪医療福祉専門学校)

MED ギフトで主体的で協同的な学びを促す教授方法について学び、これまで講義形式で行ってきた授業をアクティブ・ラーニングへと変更した。

言語聴覚士の専門科目である失語症の授業を通して、基礎から教えるのではなく、学生の気づきや疑問から定義や症状を学ぶ方法へとシフトした。学生の素直な疑問は明確な学習動機となり、自己主導的な学習へとつながった。この教授法を別の科目で、失語症当事者参加型授業へと展開させ、学生が学内で当事者の言語機能検査や訓練を体験し、さらには他職種の評価やアプローチを学ぶ連携授業にまで発展させた。この実践を報告し、今後の課題と展望について検討したい。

キーワード：アクティブ・ラーニング、当事者参加型授業、連携授業

#### 4-2 薬学部実験実習における ICT を活用した学習支援の取り組み

○高尾 郁子 (京都薬科大学)

薬学部における実験実習では、講義で学んだ医薬品や薬物治療をはじめとする薬学に関する理論を、実験を通じて検証・体験することで、知識の深化や研究手法、技能の修得、知的好奇心の喚起を図っている。実験実習の学習効果を最大化するためには ICT の活用が有効であるが、その導入には、安価でかつ、学生と教員双方の ICT リテラシーがそれほど高くなくても利用可能な方法の採用が望ましいと考える。そこで本発表では、現在私達が実験実習科目に取り入れている身近な ICT (学生自身のデバイスやオンライン Excel など) を活用した学習支援の実施事例を中心に、その導入に至る経緯や問題点、学生の反応などについて報告する。

キーワード：ICT 活用、学習支援、実験実習

#### 4-3 診療参加型臨床実習における自律学習と調整型学習の促進

○佐藤 直 (札幌医科大学 医療人育成センター)

救急の診療参加型臨床実習において、質の高い蘇生技術の習得が求められる。私たちは、自由練習の機会提供が教育効果に与える影響を検討した。実習初日にシミュレータを活用したトレーニングを提供し、質向上に向けた振り返りを行った。2週間の自由練習後に再評価を実施した。

再評価のスコアは向上し、特に CCF と圧迫深度の改善が顕著であった。自由な練習環境は自律学習や調整型学習を促進すると考える。学生の主体性を強化しつつ、シミュレータのフィードバックを活用して必要な調整を行ったと考える。基礎は教え、応用は学ばせる教育アプローチの効果だと考える。今後は練習量や習熟度との相関分析を行いプログラム設計に繋げることが期待される。

キーワード：自律学習、調整型学習、自由練習

#### 4-4SimMan3G を用いた急性心筋梗塞初期対応のシミュレーション教育の実践

○伊藤 智範（岩手医科大学）

急性心筋梗塞診療のシミュレーション学修を構築して、現場感覚を学生に体験してもらうことを実践したので報告する。事前学習を受けた本学医学部臨床実習生 4-5 名ごとに、60 分の臨床講義後、国家試験の臨床問題をもとに作成したシナリオを用いて、胸痛シミュレーションを行った。症例は、救急車で搬送された 50 歳代男性。指導医のもと、医療面接と心電図で ST 上昇型心筋梗塞と診断させた。ゴールをカテ室入室までの 30 分と設定し、各種初期対応を行なわせた。カテ室入室までに致死的不整脈へ電氣的除細動を実施させた。目標の 30 分を超えるグループはなく、DASH によるデブリーフィングでは、おおむね好意的な回答であった。

キーワード：シミュレーション、デブリーフィング、急性心筋梗塞初期対応